

# 「むざん」の理由<sup>わけ</sup>

高野山大学文学部助教

浜畑 圭吾

はじめに

むざんやな甲の下のきりぎりす

江戸の俳聖・松尾芭蕉は、五百年ほど前に活躍した斎藤実盛を想い、「むざん」と詠んだ。『平家物語』の「あなむざんや、斉藤別当で候けり」という言葉に触発されたものであろうが、芭蕉もまた、この、幾多の戦塵をかくぐつてきた老武者の人生とその最期を、「むざん」（いたましい）と感じたのである（1）。

ある夜、実盛は自分と同じ境遇の侍を集めて酒宴を開き、平家の侍として戦場に赴くという覚悟を述べた。その後『平家物語』は「北国にて皆死にけるこそむざんなれ」と結んでいる。やはり「むざん」であった。

しかし実盛の死そのものが「いたましい」わけではないだろう。むしろ、本人にとつては満足のいく最期ではなかったか。分を越えた錦の直垂の着用を許され、望み通り生涯を現役で終えた実盛が、一体なぜ「むざん」であったのか。

## 一、義仲との接点

木曾義仲は首を見たとき、一目で実盛とわかつている。その理由として、『平家物語』には「義仲が上野へこえたりし時、おさな目に

見しかば」とあって、幼少の頃義仲は実盛に会っていたとしている。それでは、義仲が上野へ越えた時とは、一体いつのことだろうか。久寿二年（一一五五）、義仲の父源義賢は武蔵国大蔵で、甥悪源太義平（義朝の子で頼朝・義経の兄）によって討たれた。いわゆる大蔵合戦である。そのとき義仲は母に連れられ、本拠上野を捨て、信濃の豪族中原兼遠を頼って落ちていったという。「上野へこえたりし時」とはそのときのことであろうか。しかし、当時わずか二歳であった義仲に、そうした記憶が残っていたとは考えにくい。

『平家物語』には、諸本と呼ばれるいくつかの別バージョンがあり、読み本系と語り本系という大きく二つの系統にわかれる。よく目にする『平家物語』のほとんどは語り本系である。能（実盛）の基になったと考えられる語り本系の中でも代表的なものに覚一本『平家物語』（一三七一年成立）があり、先述したのはその覚一本である。『源平盛衰記』などは読み本系の最も有名なものである。

そのなかで比較的古い形を多く残しているとされる読み本系の延慶本『平家物語』（一三〇九年頃成立）では、「一年義仲おさなめに見しかば」とあるのみで、上野云々は見えないのである（2）。恐らくこちらの方が実情に近いのではあるまいか。実盛が武蔵と都を往還する途中で、あるいは東国社会の中で、義仲と顔を合わせる機会があっただろう。

また、樋口次郎兼光（中原兼遠の子）は「なれあそんで見しつた

るらん」ということで首を確認するよう、言われている。義仲の乳母子の一人である兼光は、かつて実盛と親しくつきあっていたらしい。義仲が黒髪の原因を尋ねた時の、兼光の言葉は興味深い。

弓矢とりはいささかの所でも思ひ出の詞をば、かねてつがるをくべきで候ける物かな。斎藤別当、兼光にあふて、つねは物語に仕候し。

実盛は白髪を染める理由を兼光に語っていた。そのため、皆知ることができたのである。どのような場面かは想像するしかないが、あるいは実盛の「いくさ語り」のなかで聞いたのかもされない。先輩武者が後輩武者に自分の経験や戦場での心構えなどを説くことは実際にあったようである。兼光が折に触れて、先輩武者実盛から、若き日のいくさ話を聞いていたとしたらどうであろうか。

「むざん」を理解する為に、私たちも振り返っておこう。

## 二、源義朝を救った実盛

武蔵国長井庄の別当であった実盛は、保元・平治の乱を源氏の武将として戦っている。とりわけ平治の乱（一一五九年）では、義朝の側近後藤実基とともに待賢門の合戦で活躍したようだ。取った首を預けて戦う実盛の姿が『平治物語』に描かれている。

なかでも白眉は、義朝敗走の折、東国へ落ちる主人に従い、待ち伏せする比叡山の荒法師たちと対峙したときであろうか。

敗走する三十余騎の源氏方に、二百ばかりの山法師たちと戦う気力は残っていなかった。そこで一計を案じた実盛は、「自分

たちは義朝一行ではなく、仮武者（合戦の際に臨時で雇われる武者）であり、鎧兜は差し出すから見逃して欲しい」と声をかけ、自らの兜を投げた。欲に目がくらんだ法師たちが兜の奪い合いをはじめると、義朝勢は一気に駆け抜けたのである。

山法師たちは慌てた。そのうちの一人が「返せ、止まれ」と後を追おうとすると、弓に矢をつがえた実盛が馬首を転じ、

義朝の郎等に武蔵国の住人、長井斎藤別当実盛といふ者也。とどめむとおもはばとどめよ。（『平治物語』）

と叫んだのである。手向かいする者はなかったという。

源氏にとって平治の乱は、以後三十年に及ぶ一族雌伏の時代の始まりである。最後は討たれたとはいえ、源氏の棟梁義朝の窮地を救った実盛の武勲譚は印象的であろう。

もちろん、実際にこうした逃亡劇があったかどうかはわからない。実盛が源氏方であったことは疑いないが、どのように戦ったのかは物語からしかわからないのである。

しかし、実盛の半生は、源氏方としてであった。兼光が聞いたであろう武勲譚も、源氏の武者としてのものが多かったはずである。

## 三、赤地の錦の直垂

源氏恩顧の武者であった実盛が、最期を平家方として迎えようと思ひ立った心のゆくたてを、『平家物語』は語らない。先述した酒宴の場ではすでに気持ちちは固まっていたようである。そういうことはあまり語らない方が良いのかもしれない。

しかし、『平家物語』はその後数百年、実盛の名を歴史に刻む

功績を果たした<sup>3</sup>。錦の直垂である。本来将軍しか着用することができない錦の直垂を、実盛は決死の覚悟と引替に宗盛から許された。「故郷に錦を飾る」ということだが、能(実盛)では、「赤地の錦の直垂を下し賜はりぬ」となっている。

なぜ「赤地」なのか。

覚一本『平家物語』も実盛の直垂を「赤地の錦の直垂」としており、能本もその影響であろう。それでは、「赤地の錦の直垂」はどのような人々が着るのだろうか。『平家物語』を見てみよう。

まず巻五「富士川」では大將軍平維盛(二二歳)が着ている。言うまでもなく平家の嫡流であり、光源氏の再来と褒め称えられた美男子でもある。富士川合戦には実盛も参加している。また巻八「山門御幸」では義仲(二九歳)も、巻九「河原合戦」では源義経(二五歳)、巻十一「能登殿最期」では平教経(二六歳)などが着用している。いずれも大將軍であるが、もう一つ共通する点として、比較的若い武者であるということが挙げられよう。「赤地の錦の直垂」は華やかな若武者の出で立ちだったのである。

『平家物語』は、諸本によって温度差はあるものの、装束でその人物のイメージ作りをする。いわゆる「舞台衣装」である。錦の直垂であれば、黒でも紺でもかまわないはずだが、『平家物語』は取って赤地を選んだということである。

齢七十を超えた実盛が髪を染めた理由は、戦場で若者に後れを取りたくないということであったが、実盛の最期を飾る「赤地の錦の直垂」もまた、若々しさの象徴だったのである。

## おわりに

元禄年間(一六八八―一七〇四)、水戸光圀は実盛の鎧兜に對

面している。しかし光圀は、手を触れなかつたらしい。その理由として「源氏の武士でありながら、平家に降参したので、武功がどれほどあっても、自分は源氏だから、二心の武士の鎧を崇めるわけにはいかない」と述べたという(「桃源遺事」巻三)。水戸黄門はなかなかに厳しい。しかし、古菓には戻らないというのも一つの覚悟ではないだろうか。

実盛の首を目の当たりにしたとき、兼光の脳裏を巡ったものは何であったか。髪を染めた理由だけだろうか。そうではあるまい。そこに、昔語りに聞いていた源氏武者実盛の、数多の勇姿もあったとしたらどうであろうか。その実盛が、今、平家の武者として戦死したのである。

「むざん」という言葉からは、主の浮沈に翻弄されながらも武者としての覚悟を示した実盛への、哀切な同情の響きが聞こえてくる。

## 【注】

(1) 断りの無い限り引用本文は覚一本『平家物語』である。覚一本は日本古典文学大系(岩波書店)を使用した。延慶本は北原保雄・小川栄一編『延慶本平家物語』(勉誠出版)を、『平治物語』は日本古典文学大系(岩波書店)を使用した。本文は読みやすさを考慮して適宜改め、振り仮名を付したところもある。能(実盛)の詞章は金剛流謡本旧版本『実盛』(繪書店)より引用した。

(2) 『源平盛衰記』では実盛が義仲の逃亡を助けたとする。『源平盛衰記』はそれらしく話を創作するところがあるが、この実盛による義仲助命譚は後年歌舞伎や文楽で有名な「源平布引流」の実盛物語の基となっていた。

(3) 錦の直垂だけでなく、髪を染めたことも、後年様々な作品に取り上げられる。南北朝の動乱を中心に描いた軍記物語『太平記』の巻第十九では、実盛の末裔として「長井斎藤別当実永」という者が戦死している。彼が戦死して名を挙げたことについて『太平記』は「サテコノ鬚髪ヲ染テ討死セシ実盛ガ末トハ覚ヘタレ」(日本古典文学大系・岩波書店)としている。また、『誹風柳多留』の「郎党に実盛墨をこく磨らせ」や「実盛の首だと烏賊を洗つてる」なども、人口に膾炙していたことを示している。